

令和元年度(第70回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞：19名 文部科学大臣新人賞：11名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	うちの <small>せいよう</small> 内野 聖陽	俳優	「 <small>さいひんぜんせん</small> 最貧前線」ほかの演技
		しげやま <small>し め</small> 茂山 七五三	能楽師狂言方	「 <small>まくらものぐるい</small> 枕物狂」の成果
	新人賞	せとやま <small>みさき</small> 瀬戸山 美咲	劇作家・演出家	「 <small>ねざー</small> THE NETHER」ほかの成果
映画	大臣賞	おさだ <small>たつや</small> 長田 達也	照明技師	「カツベン！」ほかの成果
		つつい <small>まりこ</small> 筒井 真理子	俳優	「よこがお」ほかの成果
	新人賞	しらいし <small>かずや</small> 白石 和彌	映画監督	「 <small>なぎま</small> 凧待ち」ほかの成果
音楽	大臣賞	かのう <small>えつこ</small> 加納 悦子	声楽家	「ドイツ・バロック歌曲」ほかの成果
		のむら <small>ほうざん</small> 野村 峰山	都山流尺八演奏家	「 <small>なかおとざん</small> 初代中尾都山の軌跡」の成果
	新人賞	さとう <small>しゅんすけ</small> 佐藤 俊介	オランダ・パッサ協会音楽監督	「オランダ・パッサ協会管弦楽団演奏会」ほかの成果
舞踊	大臣賞	しまぞえ <small>あきこ</small> 島添 亮子	バレエダンサー	「コンチェルト」ほかの成果
		よねざわ <small>ゆい</small> 米沢 唯	バレエダンサー	「ロメオとジュリエット」ほかの成果
	新人賞	あきもと <small>やすおみ</small> 秋元 康臣	バレエダンサー	「白鳥の湖」ほかの成果
文学	大臣賞	さえき <small>かずみ</small> 佐伯 一麦	小説家	「 <small>せんがいき</small> 山海記」の成果
		よしかわ <small>ひろし</small> 吉川 宏志	歌人	歌集「 <small>せきれんか</small> 石蓮花」の成果
	新人賞	みやうち <small>ゆうすけ</small> 宮内 悠介	小説家	「遠い他国でひよんと死ぬるや」の成果
美術	大臣賞	イケムラ <small>レイコ</small>	美術家	「イケムラレイコ 土と星 Our Planet」展の成果
		ないとう <small>ひろし</small> 内藤 廣	建築家	「高田松原津波復興祈念公園 国営追悼・祈念施設」の成果
	新人賞	みやなが <small>あいこ</small> 宮永 愛子	美術家	「 <small>そうほう</small> 宮永愛子：漕法」展ほかの成果
放送	大臣賞	みなもと <small>たかし</small> 源 孝志	脚本家・演出家	「スローな武士にしてくれ」ほかの成果
	新人賞	おかの <small>まきこ</small> 岡野 真紀子	プロデューサー	「坂の途中の家」ほかの成果
大衆芸能	大臣賞	しゅんぷうてい <small>いつちよう</small> 春風亭 一朝	落語家	「 <small>よどごろう</small> 淀五郎」ほかの話芸
	新人賞	はやしや <small>しょうらく</small> 林家 正楽	紙切り師	「鈴木演芸場5月下席夜の部」ほかにおける紙切りの芸
芸術振興	大臣賞	おおたに <small>いく</small> 大谷 燮	NPO法人ダンスボックス代表	「下町芸術祭2019」ほかの成果
	新人賞	たかやま <small>あきら</small> 高山 明	演出家・アーティスト	「Jアートコールセンター」ほかの成果
評論等	大臣賞	いぐち <small>ときお</small> 井口 時男	文芸批評家	「 <small>はすだぜんめい</small> 蓮田善明 戦争と文学」の成果
		きとう <small>やすひろ</small> 佐藤 康宏	東京大学教授	「 <small>じやくちゆうでん</small> 若冲伝」の成果
	新人賞	ながお <small>ようこ</small> 長尾 洋子	和光大学教授	「 <small>えっちゆう</small> 越中おわら風の盆の空間誌」の成果
メディア芸術	大臣賞	いけだ <small>りょうじ</small> 池田 亮司	現代美術家・作曲家	個展「池田亮司」ほかの成果
	新人賞	ひがしむら <small>アキコ</small> 東村 アキコ	漫画家	「偽装不倫」ほかの成果

※敬称略・部門内50音順・受賞者名の下線は女性

令和元年度(第70回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	内野 聖陽	<p>内野聖陽氏は、作品世界や役柄を深く理解し、リアルな息を吹き込む俳優である。「最貧前線」(宮崎駿原作・井上桂脚本)で演じたのは、敗戦間近に徴用された漁船の漁師。最前線に駆り出される中、骨太で真っすぐな海の男を福島弁を駆使して造形。生還することの大切さを説得力ある演技で見せた。一人芝居に挑んだ「化粧二題」(井上ひさし作)では、母に捨てられた大衆演劇の座長の悲哀と男の意地を緩急あるせりふで鮮やかに浮かび上がらせた。</p>
演劇	茂山 七五三	<p>茂山七五三氏は狂言の大曲「枕物狂」のシテ、百歳に余る祖父(おおじ)を演じ、優れた成果を挙げた。少女への老人の恋を、しっかりした狂言の様式の中で、品格と明朗なおかしさとともに表現した。その老人は無邪気で可愛(かわいい)く人間味に溢れ、かつ狂言の格を保っていた。橋掛かりの出の老いや物狂いの表現、床几(しょうぎ)に掛けての明晰(めいせき)な語り、動きや形的美しさなど見事だった。江戸時代から続く茂山千五郎家の京風の狂言を伝えている。</p>
映画	長田 達也	<p>長田達也氏は、長きにわたって日本映画の照明技師として働きながら、数多くの監督たちの映画に芸術的に貢献してきた。令和元年の「カツベン！」や「空母いぶき」、また「こんな夜更けにバナナかよ 愛しき実話」では、絶妙な照明技法を通して時代の雰囲気を出し、空間内の人物表象を巧みに浮かび彫りにするなど、その味わい深い照明設計で作品世界を彩っている。映画に必須な照明技術への際立った探究心だけでなく、作品世界を昇華させる芸術的な達成は評価に値する。</p>
映画	筒井 真理子	<p>近年、様々な映画に出演し、纏綿(てんめん)たる情緒を類いまれな存在感とともに表現してきた筒井真理子氏は、「淵(ふち)に立つ」の深田晃司監督による新作「よこがお」に主演し、さらに、複雑な女性の心理と内奥の二面性を繊細かつ大胆に演じて、自らの新たな境地を示した。それはまた、映画だけが可能にするかのようなユニークな感興の表出ともなっている。令和元年は、「愛がなんだ」(今泉力哉監督)、「ひとよ」(白石和彌監督)等の出演作も強い印象を残した。</p>
音楽	加納 悦子	<p>加納悦子氏は、オペラ、オラトリオの分野でも日本最高水準の名歌手であるが、その本領はドイツ・リートで最も見事に発揮される。ドイツ・リートの源流とも呼ぶべき今回のプログラムは、「30年戦争」から雄々しく立ち直るドイツの社会的背景まで熟知した極めて学術的にも高度な選曲である一方、そのプログラムが微塵(みじん)の銜学(げんがく)趣味に墮(お)れることのない生気に溢(あふ)れた演奏で、余人をもって代え難い唯一無二の境地を示した。</p>
音楽	野村 峰山	<p>野村峰山氏は今や尺八界のベテランとして多くの演奏会でその実力を示している。特に令和元年は、都山流の流祖である初代中尾都山の尺八作品を集めた演奏会を4回行い、尺八に対する氏の姿勢を更に明らかにした。都山の作品を各回にバランスよく配置。独奏曲以外は様々な共演者と合奏し、毎回、五線譜や尺八譜を用いた詳細な作品分析を自ら行うなど、確かな理論に裏付けされた演奏は高く評価される。</p>

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	島添 亮子	島添亮子氏は、小林紀子バレエ・シアターのプリンシパルとして長く活躍し、ほとんどの作品で主役を務めてきた。特に同団の主要なレパートリーである英国の現代バレエでの端正な身体造形と緻密な音楽性、深みのある感情表現において傑出しており、令和元年の「コンチェルト」は、これらの美点が凝縮された名演として称賛に値する。外部の出演公演においても洗練された存在感を示し、今後ますます円熟した舞台が期待される。
舞踊	米沢 唯	高い技量と深い洞察力、豊かな音楽性と表現力を併せ持ち、米沢唯氏は短期間のうちに日本を代表するダンサーへと成長を遂げた。令和元年は、「ロメオとジュリエット」において内省的かつドラマティックな演技でジュリエットを瑞々(みずみず)しく造形。また古典から現代作品まで多様な作品に主演、研ぎ澄まされたテクニックや音楽の奥底に沈潜する情感をすくいあげようとする繊細な表現力により、圧倒的な舞台成果を上げた。既に完成された高い領域に達しているが、限界を押し広げていく可能性を持ち、成熟期へと向かう今後の深化・進化が多いに期待される。
文学	佐伯 一麦	佐伯一麦氏はこれまで、私小説の領域において着実に成果を積み重ねてきた。本書は、その粘り強い探求の一つの到達点をなす。紀伊半島に行く路線バスに揺られつつ、「彼」は自然災害の痕跡に目を注ぎ、土地の記憶を掘り起こす。それは同時に、「私」の来し方を振り返り、過ぎ去っていった者たちの姿を甦(よみがえ)らせる試みにつながっていく。憂愁の深みに降りていきながら、生きることの尊さを探り当てるような真摯な旅が、ここに成就した。
文学	吉川 宏志	比喩を生かした精緻な修辞などで高い評価を得てきた吉川宏志氏だが、歌集「石蓮花」ではそれに加えて社会に向ける視線に深みと広がりが増している。沖縄の基地問題を詠んだ「金網は海辺に立てり少しだけ基地の中へと指を入れたり」からは静かで重い訴えが伝わる。また、母の闘病と死を詠んだ一連は、「見る」ことを徹底させて心情の照り翳(かげ)りを表わし、凄(すご)みすら感じさせる。端正でありつつ表現への挑戦を失わない姿勢は、実に頼もしく見える。
美術	イケムラ レイコ	イケムラレイコ氏は、長く欧州を拠点に活動し、多岐に渡るメディアを駆使した作品は、生命の循環、時間や死を克服して世界とつながる感覚という世界観を示し、その内省的な作品の持つ、曖昧な雰囲気の中の強靱(きょうじん)なイメージは、今日の閉塞感を突き破る、現代社会への提言となって秀逸である。近年の大型風景画に至る、作品群を総括した国立新美術館での大規模な個展は、真摯な姿勢で取り組んできた、多彩な創作活動の到達を示した。
美術	内藤 廣	東日本大震災以降、関連する16もの委員会委員を務めた内藤廣氏はそうした経験を背負って、海に思いをはせる祈念の形を現実のものとした。敷地全体の大きな包摂線の下に復興の軸、祈りの軸を設け、傷ついた人と風景の明日のための精神的な場にできた。大型施設にありがちな空疎さが無い理由の一つがゲート立面に穿(うが)られた約2万個の穴から漏れる光。蛍を思わせる光は立つ位置によって見え方が変わり、被災者の総体であると同時に見る者と被災者との関係の個別性にも対応している。

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	源 孝志	源孝志氏は令和元年、円熟した脚本・演出による異色の時代劇を相次いで手掛けた。「スローな武士にしてくれ～京都 撮影所ラプソディー～」では、時代劇の灯を守り続ける職人的なスタッフ、下積み俳優の群像劇と彼らの哀歓を最新の映像技術を駆使しながらコミカルに描いた。美青年に恋し、焦がれ死にしたお露の幽霊が夜な夜な相手の男の前に現れる名高い怪談の令和版「怪談牡丹燈籠」は、悪女とその情夫の視点から人間の色と欲を描く解釈が新鮮だった。
大衆芸能	春風亭 一朝	寄席定席の出演で練り上げられた言葉の運び、登場人物が自然に生き生きと活躍する。元々の口調の良さでは、テレビドラマの江戸言葉指導にも度々貢献をしている。歌舞伎の御簾内(みすうち)で囃子方(はやしかた)の名手として活躍した経験もある。その全てが今の噺(はなし)に活(いき)き、噺家(はなしか)としては層の厚い世代の中で、芝居・音曲・江戸っ子と、持ち味を十分に発揮して、カミもさりげなく、落語界で存在感を見せている。
大衆芸能	林家 正楽	林家正楽氏の紙切り芸は、寄席演芸界に欠かせない第一人者の風格を持つ。寄席で主戦する一方で、落語家に請われ落語会にゲスト出演する頻度が高い。それは落語家にとって、自分の芸を邪魔しない一方で、落語会の質を高めてくれる絶好の色物芸人であることを意味する。それが林家正楽という存在である。ここ数年、しゃべりを含めた芸域の自由さが増し、即興芸としてのおかしさを更に高みへと押し上げている。熟し続けている芸である。
芸術振興	大谷 燠	大谷燠氏は、艱難辛苦(かんなんしんく)を乗り越え、30年以上にわたり、社会や地域での人々の営みと芸術をつなぐ「場づくり」に舞踊を通して取り組み、舞台芸術のみならず、多文化共生、地域活性、国際交流、教育、人材育成において多くの功績を上げられた。新たな価値観に基づく斬新な事業の数々に対して、改めて氏の理想実現への執念と前向きで柔軟な思考に敬意を表する。これまでの経験に裏打ちされた下町芸術祭は、多様な人々が交流する新しい祭りの場として注目に値する。
評論等	井口 時男	井口時男氏の「蓮田善明 戦争と文学」は、三島由紀夫が師と仰いだ蓮田善明についてのほとんど唯一の文芸批評書である。狂熱的な国粹主義、皇国主義の国文学者として戦後においてタブーとされた蓮田善明の古典論、詩歌、小説を読み取り、単なる反動的な右翼文学者としてではなく、戦争と文学、政治と理念との間で苦悩し、葛藤する一文学者の相貌を描き出した。それは近代文学の孤独な宿命を浮き彫りにし、「昭和」の時代精神の限界を示す。
評論等	佐藤 康宏	今やすっかり国民画家となった伊藤若冲の画集や図録はあまた出版されているが、一步踏み込んだ作家論や最新の学術的成果を盛り込んだ評伝ともなるとほとんど皆無に等しい。佐藤康宏氏の「若冲伝」は美術史家による手堅い実証と厳しい真贋(しんがん)の眼を経た上で、現代への訴求力をも備える最高水準の若冲論である。本書を手取る読者は、自身の好きな若冲作品への理解を深め、その人生やセクシュアリティに思いを致し、充実した文献一覧から研究者が積み上げてきた豊かな論戦を知ることができるだろう。正に今後の道標となる評伝の誕生である。

令和元年度(第70回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	池田 亮司	平成30年パリのポンピドー・センターで、音響と映像の独創的な個展を開催した池田亮司氏は、令和元年のヴェネチア・ビエンナーレでも斬新な作品を発表、台北市立美術館でも個展を行った。ダムタイプの音楽を担当したメンバーであり、東京都現代美術館での展示にも、大規模な映像を出品した。同年には杉本博司とパリ・オペラ座の共同作品で、音楽と空間演出を行い、デジタル時代の先駆的な創造性を多領域へと開く役割も担っている。

令和元年度(第70回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	瀬戸山 美咲	瀬戸山美咲氏は現代社会と正面から向かい合おうとしている演劇人である。上演台本と演出を担当した「THE NETHER」(ジェニファー・ヘイリー作)は、ネット上の仮想空間と現実世界が混然と錯綜(さくそう)する近未来が舞台で、仮想空間での性行為提供疑惑を取り締まる捜査官と関係者の攻防を緊迫感溢(あふ)れるタッチで描き出した。若手とベテラン俳優の持ち味を引き出す巧みさ、二つの世界の鮮やかな転換など見事な演出力を示した。また実際のテロ事件をモチーフとした「あの出来事」の演出、大阪の早世した劇作家・大竹野正典の評伝劇の改訂版「埒もなく汚れもなく」の作・演出でもシユアな手腕を見せた。
映画	白石 和彌	近年の日本映画界で最も旺盛に撮り続ける監督の一人。バイオレンス作品を中心に社会性と娯楽性を併せ持つ力作を発表してきたが、令和元年はギャンブル依存症の男の転落と再生への模索を東日本大震災の傷跡に重ねた「凧待(なぎまち)」、親子の業に迫る家族劇「ひとよ」、現代日本を撃つ近未来SF的喜劇「麻雀放浪記2020」と、趣の違う3作で新境地を開いた。人間観察の深さ、社会批判の鋭さ、演出力の確かさは定評があり、更なる飛躍が期待される。
音楽	佐藤 俊介	若くしてオランダ・バツハ協会管弦楽団の音楽監督に就任した佐藤俊介氏が、昨秋、この楽団を率いて凱旋(がいせん)公演をした。凝りに凝った選曲でバロック音楽を披露し、煽情的(せんじょうてき)な、それでいて音楽の本質を突くような、自由闊達(かつたつ)な演奏で魅了した。名手揃(そろ)いの名門オーケストラで、個性的な解釈をメンバーと共有していることは驚きである。また、バツハの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータの録音も、閃(ひらめ)きのある解釈で圧倒された。
舞踊	秋元 康臣	秋元康臣氏はボリショイ・バレエ学校卒業後、国内外のバレエ団で活躍、その端正で流麗な技術には定評がある。令和元年は所属する東京バレエ団で「海賊」「くるみ割り人形」の主役を古典的な技法で堂々と務め、一方でベジュアル振付「春の祭典」では表現力の深化を見せた。さらに、日本バレエ協会公演「白鳥の湖」では、王子ジークフリードを気品ある技術と奥行きのある演技で見事に踊り、ドラマを牽引(けんいん)した。様々な作品、役柄に挑戦して成長著しく、更なる活躍が期待される。
文学	宮内 悠介	「遠い他国でひょんと死ぬるや」は卓越した創造力と表現力で、デビュー以来、特異な作品世界を築いてきた宮内悠介氏が、フィリピンを舞台に、彼の国に日本が太平洋戦争で残したものを、先鋭化するイスラム、民族問題などを背景に描く冒険活劇風の作品である。戦死した詩人、竹内浩三の足跡を辿(たど)る元テレビマンが抱えた寄り添(よ)りなさが、決して深刻にならない展開の中で際立ち、テーマに結び付いてくる。構成と筋運びは娯楽小説のそれだが、文章表現の豊かさに加え、過去の戦争を通し現代日本と日本人に向き合ったテーマは内向する文学とは一線を画する小説の可能性を秘めている。
美術	宮永 愛子	宮永愛子氏は個展「漕法」で、ナフタリンを素材にした代表作から、瀬戸内に住む家族が長年収集してきた讃岐名石サヌカイトによるインスタレーションまで、自身の実践の発展のみならず、時間の経過、地球の変遷など壮大な世界観を提示した。瀬戸内海、女木島(めぎじま)の「ヘアサロン壽」でも、その街や島の人々の生活に寄り添ったプロジェクトを実施。確立した独自の制作手法を更に拡充しつつ、未知の領域を果敢に開拓する姿勢は、この作家の潜在的な可能性と確固たる意志を感じさせた。

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	岡野 真紀子	岡野真紀子氏は取り上げにくい実際の事件や事故を果敢にドラマ化してきた。光市母子殺害事件を題材にした「なぜ君は絶望と闘えたのか」や、「尾根のかなたに～父と息子の日航機墜落事故～」 「しんがり～山一證券 最後の聖戦～」などの秀作だ。令和元年は、乳児虐待死事件の裁判員に選ばれた主婦を通して現代女性が抱える問題や孤立感をあぶり出す「坂の途中の家」、東日本大震災でボランティアを担った男女の後日談「そして、生きる」で優れた企画力、魅力的なキャスティングの力量を発揮した。
大衆芸能	江戸家 小猫	初代江戸家猫八の家の芸、動物の物まねを、まずは端正に演じる。場によっては構成を大胆に変える。新しいレパートリーを常に入れつつ、観客の興味を惹(ひ)きこみながらその持ち時間を充実させる。短い寄席の色物の持ち時間から、「トリ」の30分までを実にしっかりと演じた年度だった。物まね芸を語りで紡いで、代々の芸から、更なる飛躍が期待される。
芸術振興	高山 明	高山明氏は現代社会が抱える問題と深く向き合いつつ、演劇や美術、さらには、芸術という枠組みすらも超え、作品でありながら都市の一機能となるような独自の表現活動を続けている。「Jアートホールセンター」は、あいちトリエンナーレ2019の「表現の不自由展・その後」が電凸(でんとつ)攻撃などで展示中止になったことに応答する形で立ち上げられた作品で、アーティスト自身が電話を通じて市民との対話を重ね、芸術の役割を問い掛けようという行為は、芸術と社会の間に新たな回路の構築を期待させる。
評論等	長尾 洋子	富山県八尾町で毎年行われる「おわら風の盆」に関わる伝承の変容過程について、20世紀前半の時期を中心にきめ細かく追跡した書。俚謡集(りようしゅう)の編纂(へんさん)や共進会、全国民謡大会の開催といった、民俗芸能をめぐる全国レベルでの動きを視野に入れ、その力学の中に置き入れる一方で、単なるイデオロギー批判を越えて、それが現地の人々の中で生きた形で機能することによって新たな動きを作り出し、地域表象の再編成をもたらしていった過程を鮮やかに描き出した。
メディア芸術	東村 アキコ	2000年代を通じて数々のヒット作を輩出し、現在も複数の連載を抱える東村アキコ氏。その旺盛な挑戦心は留(とど)まることを知らない。「偽装不倫」は前代未聞の日韓同時連載で、縦スクロール・オールカラーのウェブ漫画。単行本、実写ドラマと人気を拡大し、売上げの停滞が続く漫画業界や近年冷え込む日韓関係に風穴を開けた。漫画家のみならずプロデューサーとして、メディア芸術の各分野にまたがる活躍が大いに期待できる。

令和元年度(第70回)芸術選奨
選考経過

令和元年度(第70回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
演劇	<p>演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として14名、文部科学大臣新人賞候補者として18名の推薦があり、伝統芸能から現代演劇の劇作家、演出家、俳優まで幅広い候補が並んだ。第一次選考審査会では活発な議論が交わされ、その結果、文部科学大臣賞は伝統芸能分野1名を含む5名に、文部科学大臣新人賞は伝統芸能分野2名を含む6名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の業績について様々な角度から議論が重ねられた。まず、文部科学大臣賞では「枕物狂」のシテ百歳に余る祖父(おおじ)を演じ、しっかりとした狂言の様式の中で、少女を思う老人の恋を品格と明朗なおかしさとともに見事に表現した茂山七五三氏を選出。現代演劇からは、「最貧前線」の漁船の船長役で、福島弁を駆使し、時代に翻弄される人間の悲しさ、海に生きる漁師の矜持(きょうじ)など、迫力かつ深みのある演技で役者としての存在感を見せた内野聖陽氏を選出した。文部科学大臣新人賞は、その実績と将来性をどう評価するのかの討議となり、2名の候補に絞り込まれ白熱の論議が交わされた。その結果、「THE NETHER」という近未来を舞台にした翻訳劇を、緻密に計算された装置と照明で緊迫した空気感を創り、若手とベテランの俳優の持ち味を巧みに引き出すなど見事な演出力を見せた瀬戸山美咲氏を選出した。</p>
映画	<p>映画部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として12名、文部科学大臣新人賞候補者として9名の推薦があった。第一次選考審査会では、それぞれの候補者の活動実績と、選考審査員及び推薦委員から提出された推薦理由に基づいて活発な議論が交わされた。その結果、文部科学大臣賞候補8名、文部科学大臣新人賞候補4名に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、各選考審査員が、自分が推薦する候補者について補足説明を行うとともに、他の候補者について所見を述べる形で、より踏み込んだ議論が重ねられ、文部科学大臣賞には、「カツベン!」「空母いぶき」等の作品で照明技師として見事な成果を上げた長田達也氏、複数の出演作品の中でもとりわけ「よこがお」での複雑な感情の役を、繊細かつ大胆にそして妖艶に演じ、観客を魅了した俳優筒井真理子氏、文部科学大臣新人賞には、「凧待ち」「ひとよ」「麻雀放浪記2020」での優れた演出力で力作を撮り切った白石和彌氏を選出した。</p>
音楽	<p>音楽部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として11名、文部科学大臣新人賞候補者として12名の推薦があった。第一次選考審査会において、推薦委員からの書類、選考審査員からの書類及び口頭による意見を踏まえ、文部科学大臣賞に6名、文部科学大臣新人賞に3名が候補として絞り込まれた。</p> <p>更なる情報の検証、業績の確認等を経て開催された第二次選考審査会においては、活発な議論が行われ、厳正なる審査の結果、文部科学大臣賞2名、及び文部科学大臣新人賞1名がいずれも全会一致により選ばれた。加納悦子氏によるドイツ・バロック歌曲は、これまで積み重ねられてきた様々な活動のエッセンスを感じさせた。一方、野村峰山氏による「初代中尾都山の軌跡」の一連の公演も、演奏はもとより、企画から研究成果をまとめたプログラムまで、あらゆる面で極めて充実したものだった。また、新人賞の佐藤俊介氏が音楽監督を務めるオランダの楽団と行った公演の密度には、今後の更なる発展、深化を強く期待させるものがあった。いずれも、芸術選奨に正に相応(ふさわ)しい大きな業績であった。</p>
舞踊	<p>舞踊部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として12名、文部科学大臣新人賞候補者として12名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞に5名、文部科学大臣新人賞に3名が候補として絞り込まれた。</p> <p>文部科学大臣賞の候補者では、バレエ界の人材の厚みと濃密な公演の圧倒的な量と作品の多様さから、島添亮子氏と米沢唯氏に票が入り、米沢唯氏が文部科学大臣新人賞受賞3年目という短期間で懸念する声もあったが、それを打ち消して余りある近年の急成長が高い評価を得た。島添亮子氏は小林紀子バレエ・シアターのプリンシパルとして長いキャリアを積み重ね、日本を代表するプリンシパルとの確かな実力が評価されての受賞になった。文部科学大臣新人賞については、秋本康臣氏が圧倒的な評価であった。「白鳥の湖」「春の祭典」ほか実に多くの舞台の成果が高く評価され、多くの票を得た。文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞を通じて今年は「洋高和低」だった。日本舞踊、地唄舞、琉球舞踊など和の演者の一層の奮起と修練に期待したい。</p>

令和元年度(第70回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
文学	<p>文学部門では、選考審査委員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補として15名、文部科学大臣新人賞の候補として12名が挙げられた。第一次選考審査会では全ての候補者の作品について検討した結果、文部科学大臣賞の候補を6名(小説家3名、詩人1名、俳人1名、翻訳家1名)に、新人賞の候補を5名(小説家3名、歌人1名、翻訳家1名)に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、年齢と経歴を勘案して文部科学大臣賞候補と文部科学大臣新人賞候補を1名ずつ入れ替えて検討することになった。そして文部科学大臣賞の小説分野では優劣を付け難い3作品の間で意見が割れ、熱のこもった議論となったが、私小説の方法を円熟させた「山海記」が特に高く評価され、佐伯一麦氏の受賞が決まった。文部科学大臣賞の詩歌分野では、吉川宏志氏の歌集「石蓮花」が「見ること」の凄(すご)みを徹底させた歌風により支持を得て受賞となった。文部科学大臣新人賞の選考では、対照的な作風の二つの小説が有力候補として残って容易には決め難かったが、最終的には、多彩な試みを意欲的に続ける宮内悠介氏の更なる発展を期待して、「遠い他国でひょんと死ぬるや」の同氏が受賞として決まった。</p>
美術	<p>美術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として19名、文部科学大臣新人賞候補者として19名の推薦があった。第一次選考審査会では、全ての候補者について、業績や推薦理由などを慎重に審議をし、さらに、選考審査員が候補として挙げた作家について口頭説明を聞くなど、活発な議論が交わされた。その結果、文部科学大臣賞は8名に、文部科学大臣新人賞は5名の候補者に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の評価の対象となったそれぞれの作品について、更に検討を重ね、白熱した議論が繰り広げられた。その結果、文部科学大臣賞は、まず、イケムラレイコ氏が選出された。国立新美術館で開催された大型個展において、内省的な独自の世界観を表現したことが高く評価されたのである。そしてもう一人、建築家の内藤廣氏は、東日本大震災の復興のメモリアムとしての「高田松原津波復興祈念公園」が選考審査員の多くから評価され選出された。また、文部科学大臣新人賞には、美術家の宮永愛子氏が四国での展覧会において、景色や時間の痕跡を日本的な感性で捉え表現したとして選出された。</p>
放送	<p>放送部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として13名、文部科学大臣新人賞候補者として12名の推薦があった。第一次選考審査会では、候補者の業績を詳細に検討し長時間にわたる議論を重ね、文部科学大臣賞候補者を5名、文部科学大臣新人賞候補者を8名に絞った。</p> <p>第二次選考審査会には、候補者の作品を再視聴するなどして臨み、更なる熟議の結果、演出家の源孝志氏を文部科学大臣賞に決定した。映画畑のスタッフが最新映像技術を使って時代劇撮影に苦心する舞台裏を描く「スローな武士にしてくれ」、古典に新解釈を加えた映像美に挑戦した「令和元年版 怪談牡丹燈籠」など、幅広い源氏の才能が評価された。また、文部科学大臣新人賞には、プロデューサーの岡野真紀子氏を選出した。「坂の途中の家」では裁判員制度、「そして、生きる」では震災ボランティアという社会問題を扱ったテレビドラマを、多彩なキャストを起用しながら、次々と成立させる氏の力量が評価された。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として落語家、講談師、歌手など15名、文部科学大臣新人賞候補者として落語家、漫才師、音楽家など14名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は8名に、文部科学大臣新人賞は8名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、絞られた候補者から大衆芸能の幅広い各ジャンルを総合して検討を進めた。まず文部科学大臣賞について議論したところ、落語家・春風亭一朝氏について、「芝居の喧嘩」ほか定席での安定した高座の評価に加え、「淀五郎」など、落語会での高座を高く評価する意見が出され、文部科学大臣賞贈賞が決まった。さらに、寄席で欠かせない色物芸を確立し、近年では飄々(ひょうひょう)とした、風格のある高座を見せる紙切り師の林家正楽氏を評価したいとの声が出され、文部科学大臣賞が決まった。文部科学大臣新人賞には、絞り込まれた甲乙付け難い伸び盛りの若手が複数挙げられたが、動物ものまね芸の新たな可能性と括(ひろ)がりを期待させる芸で、父(四代目江戸屋猫八)、祖父(三代目猫八)の芸を受け継ぎつつ、独自の芸風を確立しつつある江戸家小猫氏を推す声が出され、文部科学大臣新人賞に選出された。</p>

令和元年度(第70回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
芸術振興	<p>芸術振興部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として10名が推薦された。選考委員は芸術振興部門の特色と照らし合わせて両分野から6名を最終候補とした後、それぞれの観点から6候補を再度検討して第二次選考審査会に臨んだ。</p> <p>文部科学大臣賞は、大谷燠氏の地域に根差した長年の献身的活動への称賛が委員全員から寄せられ、速やかな全員一致となった。氏の20年を超えるNPO 法人ダンスボックスでの活動は、コンテンポラリーダンス公演を基軸に専門家育成、地域連携、国際交流、アーカイブなど目を見張る成果を上げている。一方の文部科学大臣新人賞は複数の審査員から「甲乙付け難い」との声が上がる中、丁寧な討議を続けて絞り込みを進めて高山明氏を選出した。氏の作品「Jアートコールセンター」は、あいちトリエンナーレ2019の「表現の不自由展・その後」の中止を受けて立ち上げた対話による作品で、氏のこうした新しい領域に踏み出す構想力と実践力こそが芸術振興部門文部科学大臣新人賞にふさわしい、との意見が選出の決め手となった。</p>
評論等	<p>評論等部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として13名、文部科学大臣新人賞候補者として13名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、芸術選奨の趣旨にふさわしく、選考対象となりうる骨格と内容とを具(そな)えていると考えられた著作として、文部科学大臣賞は5名(文学、美術、芸術批評、建築、哲学の分野からそれぞれ1作ずつ)、文部科学大臣新人賞は5名(美術、文化地理学、文学、建築史、音楽の分野からそれぞれ1作ずつ)の候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、文部科学大臣賞としては、まず、これまで積極的に論じられる対象ではなかった昭和戦時下の国文学者・文芸評論家蓮田善明について、その孤高の経験と文学的思索とが切り結ぶ界面を独創的に論じた意欲作「蓮田善明 戦争と文学」の井口時男氏が、多数の選考審査員の評価を得て選出された。さらに、もう一人として、長年の研究蓄積の上になつて、江戸期の傑出した画家伊藤若冲の包括的な評伝「若冲伝」を著した佐藤康宏氏が、他の有力な候補作との比較検討を経て最終的に選出された。文部科学大臣新人賞は、「越中おわら風の盆の空間誌」において文化地理学の方法から緻密な現地調査と社会文化史的な考察とを創造的に組み合わせ、近代日本の社会変遷の中での空間誌という未踏の分野を切り開いた長尾洋子氏が大多数の評価を得て選出された。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として10名の推薦があった。メディア芸術部門は、漫画、アニメーション、ゲームといった新しい芸術形式や、芸術のための新たなメディアの開拓、特に近年変化が著しいデジタルメディアをベースにした芸術表現についてなど、コンテンツだけでなくメディア形式の新規性を重んじる部門でもある。各選考審査員とも、まずはそうしたスピリットを共有し、各自の専門領域以外についても積極的に発言を行いながら、領域を超えた視点からの議論を行った。</p> <p>第一次選考審査会では、推薦された全候補者について、口頭説明及び資料を読み込みながら、文部科学大臣賞5名、文部科学大臣新人賞4名への絞り込みを行った。続く第二次選考審査会では、第一次選考審査会後に配布された作品資料等も参照し、更なる審査・選考を進めた。その結果、文部科学大臣賞には、90年代から新たなサウンド美学と映像との連携を探究し続け、近年では大規模データと人間の存在を重ね合わせたビジョンを精力的に提示している池田亮司氏を、文部科学大臣新人賞には、スマートフォン時代における新たな漫画表現を国際的に展開することで、ジャンルを超えたメディア芸術の可能性を切り開いた東村アキコ氏を、それぞれ選出した。</p>

芸術選奨実施要項

昭和45年 5月13日
文化庁長官裁定
一部改正 平成11年 5月13日
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年 12月26日
一部改正 平成24年 4月 1日

1 趣 旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

2 部 門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家，演出家，演技者，舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家，脚本家，撮影者，演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家，指揮者，作曲家，演出家，舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家，演出振付家，舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家，翻訳家等）
- (6) 美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
- (7) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家，演出家，演技者等）
- (8) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショー・ポピュラーミュージック等の作家，作曲家，演出家，演技者等）
- (9) 芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (10) 評論等（芸術評論家，文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
- (11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

3 賞の対象

- (1) 賞は，文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は，特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので，各部門2名以内（ただし，放送部門，芸術振興部門，メディア芸術部門は1名以内）を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は，新人の芸術家（個人）を対象とするもので，各部門1名以内を原則とする。
- (4) 過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については，原則として対象としない。

4 選考の時期及び選考の基準

- (1) 選考は，毎年，原則として1月中に行うものとし，選考の対象となる業績は，主として前年の1月から前年の12月までの間にあげられたものとする。
- (2) 選考に際しては，これまでの業績に加え，将来性，年齢，他の受賞歴等も勘案して選出する。

5 選考方法

- (1) 各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い，受賞者を決定する。
- (2) 前項の審査のため，各部門ごとに選考審査会を設置する。
- (3) 各部門ごとに推薦委員を設け，選考審査会に候補者を推薦する（評論等部門，芸術振興部門を除く）。
- (4) 選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家，専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

芸術選奨実施細則

平成11年 5月13日
文化庁次長決裁
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年12月26日
一部改正 平成24年 4月 1日

1 選考実績

実施要項4(2)の選考にあたっては、下記のこと留意する。

- (1) 日本芸術院会員、重要無形文化財(各個認定)保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
- (2) 物故者は対象としない。
- (3) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は70歳未満、新人賞は50歳未満とする。
- (4) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

2 選考方法

- (1) 選考にあたっては、各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、評論等部門及び芸術振興部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができるものとする。
- (2) 芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
 - ① 新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
 - ② 複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
 - ③ 他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

3 実施要項3(3)に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。

- (1) 活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
- (2) 今後活躍が大いに期待されること。

令和元年度(第70回)芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】		【放送部門】	
小田 幸子	日本大学芸術学部非常勤講師, 能狂言研究者	碓井 広義	上智大学文学部新聞学教授
河野 孝	文化ジャーナリスト, 演劇評論家	岡田 恵和	脚本家
近藤 瑞男	共立女子大学名誉教授	鈴木 嘉一	放送評論家
出口 逸平	大阪芸術大学教授	林 真理子	作家
濱田 元子	毎日新聞説論委員兼学芸部編集委員	藤田 真文	法政大学社会学部教授
宮辻 政夫	演劇評論家	水田 伸生	株式会社日テレアックスオン執行役員
渡辺 弘	(公財) 埼玉県芸術文化振興財団業務執行理事兼事業部長	八木 康夫	TBSテレビ社長室顧問, プロデューサー
【映画部門】		【大衆芸能部門】	
明智 恵子	キネマ旬報編集部エグゼクティブ・エディター	荻田 清	梅花女子大学名誉教授
岩波 律子	岩波ホール支配人	小倉 エージ	音楽評論家
岡島 尚志	国立映画アーカイブ館長	中村 真規	演芸プロデューサー
古賀 重樹	日本経済新聞社 編集委員	布目 英一	横浜にぎわい座館長, チーフプロデューサー
滝田 洋二郎	映画監督	前田 憲司	芸能史研究者
部谷 京子	美術監督	油井 雅和	毎日新聞記者
村山 匡一郎	映画評論家	渡邊 寧久	演芸コラムニスト, 演芸評論家
【音楽部門】		【芸術振興部門】	
岡田 暁生	京都大学教授	新井 鷗子	東京藝術大学特任教授
岡部 真一郎	明治学院大学教授	大友 良英	音楽家
加納 マリ	日本音楽研究者	熊倉 純子	東京藝術大学教授
國土 潤一	音楽評論家	島 敦彦	金沢21世紀美術館館長
齊藤 裕嗣	東京文化財研究所客員研究員	富山 省吾	映画プロデューサー, 日本映画大理事長
白石 美雪	武蔵野美術大学教授, 音楽評論家	久野 敦子	(公財) セゾン文化財団常務理事
野川 美穂子	東京芸術大学講師	吉本 光宏	ニッセイ基礎研究所研究理事
【舞踊部門】		【評論等部門】	
稲田 奈緒美	桜美林大学准教授	今福 龍太	東京外国語大学大学院教授
織田 紘二	日本芸術文化振興会顧問	神山 彰	明治大学教授
亀岡 典子	株式会社 産業経済新聞社 大阪本社 編集委員	川村 湊	法政大学名誉教授, 文芸評論家
長野 由紀	舞踊評論家	榎木 野衣	美術批評家, 多摩美術大学教授
平野 英俊	舞踊評論家	武田 潔	早稲田大学教授
本多 美男	舞踊家, (公社)日本バレエ協会常務理事	玉蟲 敏子	武蔵野美術大学造形学部教授
守山 美花	尚美学園大学非常勤講師	渡辺 裕	東京音楽大学教授
【文学部門】		【メディア芸術部門】	
栗木 京子	歌人	飯田 和敏	立命館大学映像学部教授
篠田 節子	小説家	岡部 あおみ	バリ日本文化会館展示部門アーティストディレクター, 美術評論家
沼野 充義	東京大学大学院人文社会系研究科教授	久保田 晃弘	多摩美術大学教授
野崎 歆	放送大学教授	小出 正志	東京造形大学教授
平出 隆	多摩美術大学教授	しりあがり 寿	漫画家, 神戸芸術工科大学教授
正木 ゆう子	俳人	山村 浩二	アニメーション作家, 東京芸術大学教授
松浦 寿輝	作家 詩人	吉村 和真	京都精華大学マンガ学部教授・副学長
【美術部門】		【部門内五十音順】	
内田 篤具	MOA美術館館長		
小川 教生	多摩美術大学教授		
笠原 美智子	公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館副館長		
片岡 真実	森美術館館長		
中井 康之	国立国際美術館副館長兼学芸課長		
名児耶 明	前(公財)五島美術館副館長		
福田 美蘭	画家		
森山 明子	武蔵野美術大学教授		
柳原 正樹	独立行政法人国立美術館理事長, 京都国立近代美術館長		

令和元年度(第70回)芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】		【美術部門】	
網本 尚子	東京富士大学教授	五十嵐 太郎	東北大学大学院工学研究科教授
井上 桂	水戸芸術館 ACM劇場 芸術監督	榎木 啓子	大阪中之島美術館準備室研究副主幹
大堀 久美子	演劇ライター	小倉 実子	京都国立近代美術館主任研究員
河内 厚郎	阪急文化財団理事, 兵庫県芸術文化センター参与	小沢 剛	美術家
古城 十忍	(公社)日本劇団協議会常務理事	加藤 泰弘	東京学芸大学教授
児玉 竜一	早稲田大学教授	唐澤 昌宏	東京国立近代美術館工芸課長
祐成 秀樹	読売新聞文化部記者	神林 菜穂子	ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション主任学芸員
中井 美穂	アナウンサー	鴻池 朋子	アーティスト
秋尾 瞳	演劇・映画評論家	立島 恵	(公財)佐藤国際文化育英財団 佐藤美術館学芸部長
広瀬 依子	追手門学院大学国際教養学部講師	田村 麗恵	東京都美術館学芸員
【映画部門】		永田 晶子	美術ライター
伊津野 知多	日本映画大学	橋本 真之	鍛金家
小野寺 修	協同組合日本映画・テレビ録音協会理事長	花里 麻理	茨城県陶芸美術館学芸課長
掛尾 良夫	城西国際大学メディア学部招聘教授(学部長)	藤崎 圭一郎	東京藝術大学教授
杉原 永純	映画キュレーター・プロデューサー	真住 貴子	国立新美術館主任研究員・教育普及室長
中山 治美	映画ジャーナリスト	光田 由里	D I C川村記念美術館学芸部マネージャー
関口 裕子	文筆家, 編集者	【放送部門】	
中条 省平	学習院大学文学部教授	岡室 美奈子	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長, 早稲田大学文学学術院教授
暉峻 創三	映画評論家	音 好宏	上智大学文学部教授
原田 健一	新潟大学教授	上滝 徹也	評論家, 日本大学名誉教授
矢田部 吉彦	東京国際映画祭 作品選定ディレクター	坂元 裕二	脚本家, 東京芸術大学教授
【音楽部門】		佐藤 一彦	フリープランナー
大谷 紀美子	相愛学園学園長	里見 繁	関西大学教授
小畑 恒夫	昭和音楽大学特任教授	武田 和	(公財)川喜多記念映画文化財団代表理事
鷹田 治子	武蔵野音楽大学教授	西村 与志木	JCA西村オフィス代表, フリープロデューサー
武内 恵美子	京都市立芸術大学准教授	樋口 尚文	映画評論家, 映画監督
塚原 康子	東京芸術大学教授	【大衆芸能部門】	
津上 智実	神戸女学院大学教授	相羽 秋夫	演芸評論家
新美 徳英	作曲家	今岡 謙太郎	武蔵野美術大学教授
堀内 修	音楽評論家	太田 博	大衆芸能ジャーナリスト
山田 治生	音楽評論家	大友 浩	演芸研究家, 文筆家
横原 千史	音楽評論家, 兵庫県立大学講師	香取 良彦	東京藝術大学非常勤講師
【舞踊部門】		佐藤 友美	東京かわら版編集長
阿部 さとみ	舞踊評論家	岸原 健太	音楽評論家
猪崎 弥生	放送大学東京足立学習センター所長, お茶の水女子大学名誉教授	古川 綾子	国際日本文化研究センター助教
楯屋 一之	神奈川国際文化観光局舞台芸術担当部長, 兼神奈川県立青少年センター参事	松尾 美矢子	演芸ライター
唐津 絵理	愛知県芸術劇場シニアプロデューサー	村井 康司	音楽評論家・尚美学園大学講師
古賀 司郎	前(公社)日本舞踊協会事務局長, 古典芸能評論・研究者	【メディア芸術部門】	
桜井 多佳子	舞踊評論家	岩下 朋世	相模女子大学准教授
鈴木 英一	早稲田大学演劇博物館招聘研究員	遠藤 諭	角川アスキー総合研究所主席研究員
多々納 みわ子	舞踊家, (公社)日本バレエ協会理事	門倉 紫麻	フリーライター
坂東 亜矢子	演劇評論家	木船 園子	アニメーション作家, 東京工芸大学教授
望月 辰夫	日本芸術文化振興会舞踊分野プログラムディレクター	佐藤 雅彦	東京藝術大学大学院教授
【文学部門】		田坂 博子	東京都写真美術館学芸員
尾崎 真理子	文芸評論家, 読売新聞調査研究本部客員研究員	原 久子	大阪電気通信大学総合情報学部教授
乙川 優三郎	作家	東泉 一郎	クリエイティブディレクター, デザイナー
恩田 侑布子	俳人	藤津 亮太	アニメ評論家
小島 ゆかり	歌人	米光 一成	ゲーム作家
田中 和生	文芸評論家, 法政大学教授	【部門内五十音順】	
城戸 朱理	詩人		
藤島 秀憲	歌人		
松家 仁之	小説家		
松永 美穂	早稲田大学教授		
宮内 勝典	小説家		